



難問に挑戦

人は何故、戦うことを止めないのか？

人は何故、戦うことを続けるのか？

この二つの問いは同質ではないような気がする。

いずれにしてもこれらの問いは

「人はどこから来て、どこへ行くのか？」よりも難しいかも知れない。

二つの問いに近づくために

「人は何故、戦いを始めるのだろうか？」

という橋を掛けてみた。

次にそれぞれの文頭の「人は」が気になり始めた。人類とする人もいる。人類の歴史と共に古い問いだからだろう。然し、

人や人類は抽象名詞である。戦争は具体的な行為である。具体的な行為は実体ある者によって為される。それを為すのは「WHO」だ

戦争を体験した人は殆ど「二度と繰り返してはいけない」と言う。

歴史を学んでも「戦争ほどむなしく愚かなものはない」と解る。

平常では多くの人がそう思っている。

然し、戦いのエネルギーはどこからか出てくる。

(1)競争の始まり

集団内に二つのグループが出来ると競争が始まると学んだ。

何故二つのグループが出来るとかは理論ではなく実習を通じて自然発生的にできることを体験的に学んだ。二つのグループが出来るとまでは集団は動かない。長い長い沈黙の後、しびれをきらしたように誰かが声をだす。長い沈黙がある時間続くと集団は壊れてしまう。静止状態は恐怖である。恐怖から逃れるために動き始める。待つ

ていたとばかりにその声に反応する。集団が小さい場合は全員がその声についていき、行動が始まる。この集団の目的は何かとの議論が始まる。目的が確認されると自然発生的に役割分担が始まる。

それらの集団がある程度の規模になると、今までの動きに対して賛成するもの、反対するものが出る。そして、あたかも細胞が分裂するかのようには二つのグループができる。二つは戦う為にできたわけではない。その集団が死なないようにするために、更により良く生きる為の行動の糸口を見つけるために再び長い長い沈黙の後に来たのだ。

時が経ち二つが分裂と結合を繰り返す、あたかも細胞が分裂して手足や臓器ができていくように均整のとれた形が出来上がっていく。あるとき分裂が期待された結合をしないで分裂のままの状態になってしまった。原因は判らない。判らないものに直面したことの無いとき、既成のそれは混乱する。とりあえず失った一つを補う為に残ったもので均衡を保とうとする。この先の話は複雑で語りきれないがとりあえず先に進む。

失った一つが成長して敵対してくるかも知れない。仲良く近づいてくるかも知れない。判らない。さきが見えない。不安になる。とりあえずは自分を守ることをしよう。その為にはどうするか？

(2)二極化と大義

我々の祖先が遊牧の時代は家族がその日暮らせる獲物があれば十分であった。弱肉強食の時代を経て病弱な家族を救うために又効率よく獲物を得るために複数の家族による群れができる。病弱な家族を足手廻りになると見捨てた集団もあったであろう。救うか否かを誰かが決めなければならない。リーダーが必要になってくる。集団が小さいときは全員の意見が聞けるが決めるのはリーダーである。

気候が安定してくると定住が始まる。定住は農耕と牧畜が基本である。それぞれの保存本能によって人口は増え、牧畜も増える。必要なのは土地だ。狭くなる又は天候の変化で移動も必要になる。ゲルマン民族の大移動を思い出す。今日生きる為の食料の確保が必要だ。他人の土地に入るためには自己本位でなければ、他人のことを考えていたら入れない。その為には先ず、自分を納得させる大義がある。この大義の構築の仕方は今も昔も変わらないようだ。自分たちの行動は正義だ、だから当面の悪も許されると自己正当化がなされる。

何らかの基準と比較による先進と後進、優と劣に分けられる。

グループが二つ出来ると競争が始まる。やはり本当なのか？では競争がなぜ戦争になるのかを問わねばならない。

自己保存本能を本能のまま放置するのではなく、他人のことも考える宗教と倫理の思想もでてきた。共存共栄の考え方も人類は学んできた。アメリカとソ連が直接対決をすると人類が滅亡するかも知れないとの危機感から「冷戦」を考え出した。冷戦とは代理戦争を意味する。朝鮮戦争・ベトナム戦争。キューバー危機だ。それぞれの戦争では核兵器使用の可能性と危険性があったことも学んでいる。チェルノブイリの悲劇を知っているロシアの大統領が最近も核兵器の使用を考えたと言って世界を震撼とさせた。

(3)支配欲も感性

欲しいのは土地と資源だ。国民の生命と財産を守るためか？

権力による自己顕示欲を満たすためか。

自己顕示欲が示したいのは「俺は強い。この強さを認め屈服せよ」ということだ。戦争は個人の欲望によって始まるのだろうか？（豊臣秀吉の朝鮮出兵、ヒットラーの選民意識、その他大虐殺事件の首謀者）その欲望にはどんな名前がつけられるのか？

発展欲、拡大欲、それらは支配欲に変わる。支配欲が国外に向かうと他国の領域を侵す。支配欲は中に留まることがないのだろうか。「これでよし！」と終わることがないのだろうか？

そう、終わることはない。欲は「よりよくなりたい」という感性の叫びだからだ。欲には人それぞれに強弱がある。欲はなんであれ過ぎれば病となる。欲は意欲にも繋がっているから欲が無くなると命は滅びに向かう。

支配欲が権力と結び付くと本人の思いを越えた方向へ歯車が回り出す。「人ならぬ人」になる。問題は権力だ。組織にはリーダーが必要だ。リーダーには権力が必要だが、リーダーの誤ちは誰が指摘して正すか。信仰も歯止めをかけることができなかった。権力的支配欲に歯止めをかけようとして近代では憲法ができた。



(4)民主と独裁が共存・憲法は危機に

憲法は国家権力の横暴に歯止めを掛けるものだ。

国家とは領土を基礎としてその中に住む人間を強制力を持った権力によって統合された社会のこと。国家は法律を作り人民を強制する。人類は歴史によく学び三権分立という仕組みを考え出した。法律は憲法を侵してはならないことになっている。為政者は憲法が作れない。国民が憲法を作ることを立憲主義という。国民主権・基本的人権が守られるのが民主主義であったはずである。はずが外れた。多数決という落とし穴があった。それが利用される仕組みが造られた。今の日本の政党政治がその典型である。属する政党の多数意見が個人の意見を抹殺する。多数決の多数決その行き着くところは無責任なのだ。異を唱えると離党される。離党されるとお金が貰えないから黙る。無責任でお金が貰える。権力もある。これは止められない。息子にもやらせよう。その結果、議会制民主主義下の独裁政治が現れたのである。選挙制度を巧みに操り変えて長い時間（70年）をかけ現憲法の3本目の柱である第9条が侵害され始めたのである。

日本国憲法には三大基本原理がある。

①基本的人権

②国民主権

③平和主義である。

③を変えるために閣議決定がなされてきた。閣議決定権は解釈によって守られている。内閣＝国会になった。三権分立機能は失われた。

(5)自然な賛成

自由と責任はワンセットであることの教育が特に政治家に欠けていた。だから国民がそれを真似た。そして、いきすぎた自由が「公共の福祉に反しない限り」という制限がつけられる。大多数の国民はこれに反対する感情はない、どちらかと言えば賛成である。「自然な賛成」である。この「自然な賛成」に訴えて憲法改正が近々なされる。「自然な賛成」には本質を観て反対するのは難しい。洞察力がいる。今の政治家が必要としているのは国民の洞察力ではない。「自然な賛成」である。そして何ごとも無かったように自然に世の中が変わる。法律は拡大解釈によって基本的人権を侵害してくる。主題から反れてしまった。主題はなんであったか
そうだ「人は何故、戦いを始めるのだろうか？」

(6)安倍政権の歩み

安倍政権を見てみよう。第一次政権と第二次政権の安倍首相の姿勢は明らかに違う、強気である。本気という人もいる。

言葉の切れが断定的になって聞きやすくなっている。内容はともかく堂々と答え説明している。このある種の明確さが国民の人気を惹きつけている。

国会中継を見ていて野党の質問の浅はかさと安倍政権閣僚のふてぶてしさには立腹あまりあるが我々が意図せずして選んでしまったこと、国民にも責任がある。私も国民の一人である。諦めるしかないのであるが、思いを朝日新聞がとりあげてくれた。

[朝日新聞2015年4月10日朝刊4面から引用]

国会論戦で首相が多用したのが、「民主党政権時代は……」と「レッテル貼り」という言葉だった。

首相が「民主党政権時代は……」を使用するのは、二つのパターンがある。経済が上向いていることを強調したい時と、批判をかわしたい時だ。



第1次内閣以来、安倍内閣のもとで西川氏を含む7人の大臣が「政治とカネ」の問題で辞任したことを民主党議員が指摘。これに対し首相は「民主党政権時代にも外国人献金がずいぶん問題になった。2人の総理が問題に関わった」と論点をすり替えた。

「レッテル貼り」という言葉は、昨年の通常国会の衆参予算委に比べ、使う頻度が増えた。集団的自衛権を含めた安全保障法制への批判に対して用いることが多く、議論がこれ以上深まらない場面も目立った。さらに「言論の自由」発言で追及を受けた際にも、「（言論の自由と言った発言が）まったくおかしいという考え方自体が、何かレッテル貼りを一生懸命試みていると感じた」と述べた。(引用終)

いずれも巧みなはぐらかしに民主党は本質に迫れない。弱みがあるから！

(7)憎しみの連鎖

この言葉を使うときの安倍首相の顔つきから、私に一つのことが思い浮かんだ。

「あれは復讐だ。戦いはここから始まっている」（そう心の中で叫んだ）
二次政権への復帰を狙うエネルギーもレッテルを貼られたディスカウントにも復讐心が源であると私は感じる。復讐心は憎しみの連鎖となって受け継がれていく

復讐したくてもエネルギーと力がなければ諦めとなる。諦めも引き継がれるのだろうか？長年の疑問の一つである。TAで学んだ人生脚本は遺伝子を通して次の世代に受け継がれるのだろうか？答えはまだ出ない。

10代前半迄の教育は価値観を養う。継承は教育の賜である。政権は教育を操作できる。教育による憎しみの連鎖の培養は遺伝より明確である。

安倍首相の華麗なる家系を見ると祖父の岸信介からの影響は生育歴から明らかで、その権力志向は理解出来る。父は総理大臣になれなかった由、リベンジということも言われている。どんな人にも認知欲はある。認知欲は終生なくなることはない厄介なものだ。権力が増せば認知欲のレベルも高まるのだろうか。世界に自分の存在価値を認めて貰いたいと思うようになるのだろうか。権力を持ったことのない私には解らない。お金持ちが際限なくお金を求めるように認知欲の基準はモットモットと高まるのだろうか。安倍首相の官邸には祖父の写真が飾られているという。祖父に認めて貰うには祖父を越えねばならないと思っているのだろうか。祖父は一級戦犯を逃れ首相になった人である。復讐心が権力と結合するとき火山のようなエネルギーがでる。それが何処に向かうかである。安倍首相の個人的な目標は「誰かに認められること」改憲等はその手段に過ぎない。誰か・祖父は地上にはいない。地上の誰かは誰か？

復讐心がメラメラと燃えたぎっていても力が無ければ表には出せない。臨界点に達した復讐心はクーデターやテロになる。

復讐心は小さなディスカウントから始まる。その定義は「他人からの無視・無関心・軽視」である。それが厄介なのは誰かが明らかにディスカウントした場合だけでなく、なんらかの態度行為を受けてがディスカウントされたと感じたときにも復讐心の種が植えられることだ。ISは格差にディスカウントを感じたのだ。一人ではなく複数の価値観を共にする人が共振し、その輪が広がっている。価値観が大義になる大義は命を奪う。そのことを我々は戦争から学ぶ。

(8)戦争はゲームなのだ

今のわたしが判ることは、戦争を好むのは

- ①自己顕示欲・==支配欲・権力欲の強い人の類
- ②過去に被害を受けた者（ディスカウントを含む）のもつ復讐心に燃える人の類
- ③戦場には出ないで戦争で利益を狙う人の類

戦争とは自己の支配権を拡大するための侵略行為であり、相手を破壊する行為である。その行為は承認された自分の範囲に留まることができない何らかの理由（大義）があって外に向かう。国民の生命、財産を守るのも大義だ。

戦争は「もう二度と戦争はしたくない」という結末感情で終わることを万人が知っている。殺し合いの結末は勝っても負けても嫌悪感が残る。然し、それを知って又はじめる。繰り返すのである。TAではこれを「ゲーム」と定義している。ゲームは終わりが分かっている。嫌な感情で終わることを知っていて始める。だから愚かなのである。そして本当のところ誰も得をしないのである。ただ一時的に得をする人がいる。それも政治家は判っている。

だから人類は戦うことを止めるために英知を出し合ってきた。和解と許し合いを幾度もしてきた。第二次世界大戦後のフランスはドイツを許した。メルケル首相はそのことを日本で語った。ドイツが今あるのはその和解のお陰であると率直に認め合っている

(9)ふたたび学ぶ宿命か

私たちが今生きている時代は日本が再び戦争できる国に変わろうとしている。

この変わりゆく姿を通して、冒頭の疑問「人は何故、戦いを始めるのだろうか？」

「人は何故、戦うことを止めないのか？」を学び取れと私たちは命じられたのであろうか？それに答えることを命じられたのが今を生きるわたし達の役割であろうか？

今の日本には復讐心はない。70年戦うことがなかったからだ。

然し、復讐心は一撃で芽生え強烈なエネルギーが湧き出る。焼夷弾による東京大空襲を率先したあのカーチス・ルメイ少将の使命感に火を着けたのは予告無き真珠湾攻撃であった。使命感・大義が復讐心と結び付くと「人ならぬ人」の行為となる。又復讐心は権力によって造られることもしばしばあった。自作自演によって。

(10)それでも訴えたい、悲劇を・「百人斬り競争」

私は最近、日本軍将校が先の戦争において中国で行った「百人斬りの競争」という記録が南京虐殺博物館にあることを知った。それは新聞の記事である。

東京日日新聞の記事内容　　いずれも1面記事である

・① 1937年11月30日付東京日日新聞朝刊（第1報）

(見出し) 百人斬り競争！／両少尉、早くも八十人

(本文) 【常州にて29日浅海、光本、安田特派員発】常熟～無錫間の40Kmを6日間で踏破した〇〇部隊の快速.その同一の距離の無錫、常州間をたつた3日間で突破した、まさに神速、快進撃、その第一線に立つKK部隊に「100人斬り競争」を企てた2名の青年将校がある、無錫出発後早くも一人は56人斬り、一人は25人斬りを果たしたといふ、一人は―――のX,一人は同じ部隊Yが腰の一刀「関の孫六」を撫でれば,Xは無銘ながら先祖伝来の宝刀を語る。

無錫進発後Xは鉄道路線26~27Kmの線を大移動しつつ前進、Yは鉄道路路に沿って前進することになり一旦二人は別れ、出発の翌朝、Yは無錫を距る8Kmの無名部落で敵トーチカに突進し4名の敵を斬つて先陣の名乗りをあげた。

これを聞いたXは奮然起つてその夜横林鎮の敵陣に部下とともに躍り込み55名を斬り伏せた。

その後Yは横林鎮で9名、威関鎮で6名、29日常州駅で6名、合計25?名を斬り、Xはその後常州駅付近で4名斬り,記者等が駅に行つた時この2人が駅頭で会見してゐる光景にぶつかつた。

X「この分だと南京どころか丹陽で俺の方が100人くらゐ斬ることになるだらう、Yの敗けだ、俺の刀は56人斬つて歯こぼれがたつた一つしかないぞ。」

Y「僕等は二人共逃げるのは斬らないことにしてゐます、僕は〇官をやつてゐるので成績があがらないが丹陽までには大記録にしてみせるぞ」

- ②1937年(昭和12年)12月4日東京日日新聞朝刊(第2報)
(見出し) 急ピッチに躍進／百人斬り競争の経過

(本文) 【丹陽にて三日浅海、光本特派員発】既報、南京までに『百人斬り競争』を開始した、X、Y:少尉は常州出発以来の奮戦につぐ奮戦を重ね、2日午後6時丹陽入場(原文通り)までに、Xは86人斬、Yは65人斬、互いに鎬を削る大接戦となつた。

常州から丹陽までの10里の間に前者は30名、後者は40名の敵を斬つた訳で、壮烈言語に絶する阿修羅の如き奮戦振りである。今回は両勇士とも京滬鉄道に沿ふ同一戦線上奔牛鎮、呂城鎮、陵口鎮(何れも丹陽の北方)の敵陣に飛び込んで斬りに斬つた。

中でもXは丹陽中正門の一番乗りを決行、Yも右の手首に軽傷を負ふなど、この百人斬競争は赫々たる成果を挙げつゝある。記者等が丹陽入城後、息を

もつかせず追撃に進発するTT部隊を追ひかけると、Xは行進の隊列の中からニコニコしながら語る。

「Yのやつが大部追ひついて来たのでぼんやりしとれん。Yの傷は軽く心配ない。陵口鎮で斬った奴の骨で俺の孫六に一ヶ所刃こぼれが出来たがまだ100人や200人斬れるぞ。東日大毎の記者に審判官になつて貰ふよ」

- ③1937年（昭和12年）12月6日東京日日新聞朝刊（第3報）
（見出し）89-78／「百人斬り、大接戦／勇壮！X、Y両少尉

（本文）【句容にて五日浅海、光本両特派員発】南京をめざす「百人斬り競争」の二青年将校、X、Y両少尉は句容入城にも最前線に立つて奮戦入城直前までの戦績はX少尉は89名、Y少尉は78名といふ接戦となつた。

- ④1937年（昭和12年）12月13日東京日日新聞朝刊
（第4報）

（見出し）百人斬り「超記録」、
X106-105 Y／両少尉さらに延長戦

（本文）【紫金山麓にて十二日浅海、鈴木両特派員発】南京入りまで「百人斬り競争」といふ珍競争を始めた例勇士X、Y両少尉は十日の紫金山攻略戦のどさくさに106対105といふレコードを作つて、10日正午両少尉はさすがに刃こぼれした日本刀を片手に対面した

Y「おいおれは105だが貴様は？」

X「おれは106だ！」……両少尉は「アハハハ、結局いつまでにいづれが先に100人斬ったかこれは不問、結局「ぢやドロンゲームと致さう、だが改めて150人はどうぢや」と忽ち意見一致して11日からいよいよ150人斬りがはじまつた、11日昼中山陵を眼下に見下ろす紫金山で敗残兵狩真最中のX少尉が「百人斬ドロンゲーム」の顛末を語つてのち

[知らぬうちに両方で百人を超えていたのは愉快ぢや、俺の関孫六が刃こぼれしたのは一人を鉄兜もろともに唐竹割にしたからぢや、戦ひ済んだらこの日本刀は貴社に寄贈すると約束したよ.11日の午前3時、友軍の珍戦術紫金山残敵あぶり出しには俺もあぶりだされて弾雨の中を「えいまよ」と刀をかついで棒立ちになってゐたが一つもあたらずさこれもこの孫六のおかげだ」と飛来する敵弾の中で百六の生血を吸った孫六を記者に示した。

(引用にあたって氏名はX・Yとし、漢数字は算用数字に改めた)

12月10-13日が南京総攻撃の日であった。

私には戦場の経験がない。

戦場では人間の心理は通常では想像できない「人ならぬ人」になるのであろう。

ベトナム戦争で戦い殺さざるをえない状況で殺したアメリカの兵士が帰還して重い精神の病にかかったということは学んでいる。

「なぜ当時の日本人はこれほど残虐になれたのだろうか。その答えは明らかだ。殺された人たちが自分と同じように、泣いたり笑ったり愛したり愛されたりする存在だと思っていないからだ。つまり想像力が停止していた。そんなとき人は、優しいままに残虐になれる。しかも優しいままだから摩擦がない」と

森 達也さんは著書に書いておられる。

「すべての戦争は自衛意識から始まる」 (出版元 ダイアモンド社)

この新聞記事を知って思うことは、この二人は戦場で戦うリーダーであった。範を示すために率先して人を殺したのであろうか。現場にいた人はどう感じたのか。日本人もいたであろう。生き残った中国人もいたであろう。中国の人が復讐心をもつのは当然であろう。この新聞の報道に本国の日本人はどのように反応したのだろうか。オリンピックのような熱い声援を送ったのだろうか。異を唱えると「非国民として糾弾される。だから押し黙っているうちに、芽生えた違和感はいつのまにか消えてしまう。つまり実が虚に覆われる」(p25)

当時と今では報道量は格段の差がある。それが頻繁かつ格好良く利用されれば、違和感はいつのまにか消え、虚の支配が強くなる傾向は顕著になる。感性の働きがにぶくなる。感性が働かなくなる。それは戦場だけではなく、国民の日常においてもそうである。民主主義を目指して独裁を止められない日本の今もそうかもしれない。

「ヴェルサイユ体制の打倒とドイツ民族の結集を一つにして危機を乗り越えると宣言したナチスは国民から熱狂的に支持されて、民主的な手続きを経ながらファシズム体制が出現した」 (p 98)

戦場で人は「人ならぬ人」となる。考えられない残忍さが人間性には潜んでいる。

(II)それでも訴えたい、悲劇を・自国民の殺害

カンボジア共産党（クメール・ルージュ）のポル・ポトのトゥール・スレンS21の出来事はホロコーストと同じ悲劇を繰り返している。

カンボジアはベトナムの西側に隣接する国であり、ベトナム戦争（東西の代理戦争）の影響を受け、国内が分裂状態になって、内戦が壮絶な悲劇を起こすことになる。1975年に首都プノンペンを制圧したポル・ポトは前政権の高官や兵士すべてを処刑する指示をだすと同時に、プノンペンの市民200万人の身分を剥奪し、市内から農村部へ強制移住をさせ、教師などの知識人は危険分子として処刑され、海外から帰国した留学生や資本家も投獄されて殺された。眼鏡をかけている者は字が読める、本が読めるとして殺害された。その数は100万人～200万人といわれる。

「銃弾を節約するために、彼らの多くは銃剣やナイフ、鍬や鋤などで殺された。ヤシの葉の鋭い棘がある部分で咽喉を切られて殺害された人も多かったという。もちろんナイフのようにすっぱりと簡単には切れない。動けないようにロープで拘束して、何度も棘で咽喉を掻き切るのだ。大きな菩提樹の横には巨大なスピーカーが吊されていて、人々の断末魔の叫びを周囲の村人たちに気づかれないように、常に最大のボリュームの民族音楽が流されていたという。赤ん坊を処刑する際には、足を持って振り回し、この樹木の硬い幹に頭部を何度も打ちつけた。ロープで縛られた母親は傍で絶叫する。赤ん坊を殺し終えた兵士たちは、次に母親を裸にしてみんなを凌辱し、最後に木の棒などで殴り殺したという」（p262~263）

大量虐殺はベトナム戦争中にも数多くあったことが記録されている。その一例は、ベトナム市民の結婚式の行列を襲撃し、花嫁を含む7人の女性を凌辱し、宝石を奪い、3人の女性を川の中へ投げ込む暴行事件があり、メコン川流域で19人の少女の遺骨が発見されたとの記録がある。これはソンミ村虐殺事件（1968年）以前のことである。

著者の森 達也さんも「やはりわからない。なぜこれほど多くの自国民を迫害したのだろうか。人はなぜこれほどに残虐になれるのか。これほど無慈悲に人を殺せるのか。理性や感情をなくすことができるのか」「感情や理性の回路が閉じられたのだろう。回路は閉じられているのだから、残虐という言葉は当てはまらないかも知れない。むしろこのフレーズのほうが適切だ。◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎」
と言われる（◎は著書を参照してください）

トゥール・スレン21はポル・ポトが政治犯を送った収容所です。ここに収容された1万4000人～2万人のうち、生還できたのは8人だけだった。殆どは激しい拷問を受け、そして殺害された。

戦争が始まると戦場では「相手を殺さなければ自分が殺される」ことになる。そのとき人は「人ならぬ人」になることは判っている。だから武器が進歩し空爆更には無人機爆撃の時代になった。後はボタンを押すだけの戦争になる。いかにして殺人の罪悪感をなくするかが研究され武器が開発されてきた。責任を果たすのは機械なのだ。最小の人間の罪悪感で多くの人々が殺される。

地上戦は今も展開されている最中であるが前線で死ぬのは従軍兵士である。彼らは好んで戦場に出て行ったのではない。国家組織の命令に従っただけだ。(ISには例外の志願者がいる。間違っただけで戦いを挑んでいる) 組織とは誰も責任を果たさない人間が創り出した合理的なシステムだ。組織は人間の意志を無視することが多い。権力争いという内部抗争によって。内と外との戦争によって日本は破れベトナム戦争も残忍な終結となった。争いが争いを呼ぶ。

戦争を最初に仕掛けるのは知識も教養もある政治家だ。他人の痛みが分からない。いとも小さな個人の認知欲を満たす為に戦争は終わらない。抑止力という言葉があるのだから、この先どうなるかは政治家は判っているはずだ。然し、はずはいつも外れる。つもりが積もらないように。

やっぱり戦争の残酷さは訴え続けなければならない。まだ選挙権がある間は。国民が自由と責任をワンセットで考えられるように啓発されねばならない。

あとがき

妻のチェックを受け、感想を聞いた。「答えが明確でない」

ウーンそうなんだ。テーマを再度みる。

「人は何故、戦うことを止めないのか？」

「人は何故、戦うことを続けるのか？」

「人は何故、戦いを始めるのだろうか？」

私は答える。「仕掛け人がいるからだ」それは「WHO」だ。

妻は「欲」だとキッパリという。

「欲」に方向性を与えるのが価値観だ。理性と感性の共同で形成される普遍的な良心が価値観ではないだろうか。

人は誰でも「人ならぬ人」を持っている。罪という。

